

平等院の美術

1052年に寺院として設立された平等院は、以前は浄土宗と天台宗の寺院だったが、現在は独立した寺院で、日本仏教の崇拝の場所である。この寺院は、ユネスコの世界遺産に登録されているが、その理由の一つが、歴史的に重要で個性的な芸術作品が含まれていることである。

鳳凰堂は1053年に建設され、阿弥陀如来が住む世界、浄土を表象している。正面から見たときのデザインは、翼を広げた不死鳥を連想させる。鳳凰として知られる2匹の不死鳥の像が、屋根の尾根の両端に置かれている。

鳳凰堂には、ヒノキから彫られ金箔で飾られた阿弥陀如来像がある。彫刻家の仏師定朝は、「寄木造」と呼ばれる新しい技法を使用して、高さ約2.77メートルある彫像を、数枚の木材から、それぞれのパーツがぴったりと組み合わさるように彫った。

鳳凰堂と阿弥陀如来像の両方が国宝に指定されている。鳳凰堂の姿は、10円硬貨の表面に描かれている。

中央の像の周りの支持梁には、雲の上の祈る菩薩として知られる52の小さな像が飾られている。雲に浮かぶように見える彫刻は、涅槃を旅しながら仏に敬意を表して楽器を演奏している。

鳳凰堂の壁と観音開きの扉も豪華に装飾されている。阿弥陀如来像の四方にある木製の扉は、9つの来迎の図を描いている。これらの描写は『観無量寿経』の教えに基づいており、その経典には善良な人の元には、死に際に9通りの方法で仏が訪れると述べられている。

この図には、日本の四季の風景の描写も含まれており、日本で最も古い「来迎」図の実存例となっている。